

4 番（小川義昭君）

この文化創生都市宣言というのは、市長もある程度御理解されておられると思うんですけども、やはりこの文化・産業・観光などのそういった振興のための連携というか、そういったことをやっぱり図っていただきたい。僕はやっぱりこれは総合行政だと思うんですよ。

それで、やはりこの文化の力と産業の力というのは、本市のまちづくりの僕は両輪にぜひすべきであって、そしてそれは本当に表裏一体だと。ですから、そのための一体の認識を持った中で、一体の施策、そして一体の組織、そういったものがこれから必要じゃないかなというふうに思います。

それでは、4 番目に入ります。

これもいろいろな角度から何度か触れてきた、今ほど市長のほうのお話もありましたように、松任駅周辺の文化ゾーンのにぎわい創出策についてであります。

J R 松任駅周辺は、北陸新幹線の平成 27 年春の開業を目指し、大きく変貌しつつあります。商業施設の立地が進む駅北地区に対し、特に駅南地区は、中川一政記念美術館初め 10 の公共文化施設が集積し、本市の文化芸術活動の中心的な役割を担う文化ゾーンとしての環境整備が整っています。十分とは言えませんが。

駅舎を出ると、すぐ目の前に文化ゾーンが大きく開かれている。このような地方都市で、やがて J R 在来線となる J R 松任駅前は、国内においても大変珍しい存在ではないでしょうか。

今回の質問で私が特に強調したいのは、平成 27 年春もうすぐですが北陸新幹線が金沢駅まで整備・開業し、福井敦賀へ延伸の動きも聞こえる変化への対応であります。隣の金沢市では、関東、上信越方面などから多くの交流人口を期待して、積極的な施策が進められています。

我が白山市も、その人たちや経済活動などを呼び込まなくてはならないと考えます。その有力な窓口が J R 松任駅であります。そのためにも、駅前が魅力ある文化ゾーンとなるよう、さらなる充実が必要であります。

私は平成 21 年 9 月議会で、「駅前文化ゾーンは、公共施設の集積メリットを生かし、地域住民、地域商店街との協議の場を呼びかけるなど、まちに飛び込み、まちに生きる文化とともに、文化ゾーン価値の発掘・高揚に努め、連携・一体的な交流・管理体制を構築し、文化ゾーンのにぎわいを醸し出すべきであります」とただしたのに対し、角前市長も、「私もこの駅前周辺の文化ゾーン、せっかくなつくつた施設とあの広場の利用については、各種団体等に呼びかけ、積極的にこれから利用推進を進めていきたい」と答弁されました。

しかし、実態はどうでしょうか。市民の皆さんから次のような多くの苦情が聞こえます。松任駅前ロータリーに関しては狭過ぎる、どうして北鉄バスの乗りおりができないのか、駅から美川、鶴来、山ろく方面への直通の公共交通機関がないのか、まるでタクシーの乗降場ではないか、市内観光地のパンフやチラシには、J R 松任駅の存在やアクセスさえい

まだに掲載されていないなど。

また、それぞれ公共施設には、暗い、入りにくい、案内所や案内サインがなく、どこにあるかわからない、設備が古く使いづらい、定期的なメンテナンスがなっていないなど。さらには、大きなお金をかけて施設などを整備したが、ただの自己満足で終わっている。交流人口をふやすために開発したのではなかったのか。わずかな案内チラシや市広報にも市の施設だけを紹介し、指定管理に移した施設などは排除している。縦割りお役所仕事のように事業の全体像がわからず、文化ゾーンのにぎわい目的が忘れられている。市に柔軟な対応を望む。箱物をつくるだけではだめ、積極的な活用や連携が弱いなどであります。

確かに、それぞれの公共施設や千代女の里俳句館前などの広場で幾つかのイベントが市民参加も促して開催の努力がされています。しかし、それぞれの公共施設や指定管理施設が、地域の商店街、町並み回遊など、市民ら個人、団体なども巻き込んだ連携性、一体性、継続性の面から考えますと、まだまだ不十分のようであります。

そこで質問と提言です。以前にも提案したのですが、北陸新幹線開業に向け、JR 駅前の中川一政記念美術館を初め 10 の施設を傘下に統合管理する（仮称）白山ミュージアム館なるものを組織し、一館長――民間人の公募・登用も含む――のもとで松任駅前文化ゾーンのメリット、にぎわいをさらに追求する一体的な運営管理を行ってはいかがか。

さらに、（仮称）白山ミュージアム館を民間の力を活用するという意味から指定管理者制度で運用してはいかががでしょうか。市長の見解をお聞きいたします。